

〔資料〕

弾誓・澄禪・常宇資料(2)

関口 静雄

〔解題〕

木食上人弾誓の行実を伝えるいわゆる弾誓伝の諸本を記す。

1 『弾誓上人絵詞伝』（通称「塔之峰阿弥陀寺本弾誓伝」）

神奈川県足柄下郡箱根町塔之澤所在阿育王山放光明律院阿弥陀寺蔵。

紙本着色絵巻三卷。原本無題。箱書「縁起」、蓋裏書「秋元伊賀守寄附」。

詞書筆者不明。十三段目絵奥に落款「常燿写之」と方形朱印「朴由」

が存し、画工が狩野常信門人津田常燿朴由と知れる。全文写真が『箱

根町誌』第三卷（一九八四年三月）に載り、脇坂淳氏「塔の峰阿弥陀寺本につ

いて」（三浦吉文化十一号、一九七二年三月）に詞書の翻刻が載る。同氏は本絵巻の成立を

正徳年間（一七一〇～一七一五）とされる。なお本絵巻は箱根町の指定・

登録文化財に指定されているが、吉田幸平氏『弾誓譚』（二〇〇六年八月、中日出版社）

によると、譲渡され現在はフランスの亜細亜研究所蔵という。

2 『浄発願寺縁起絵巻』（通称「一ノ沢浄発願寺本弾誓伝」）

神奈川県伊勢原市日向所在無常山浄発願寺蔵。紙本着色絵巻三卷。原

本無題。寺伝に「縁起」という。『伊勢原市史 別編社寺』（一九九九年三月）に

詞書の翻刻が載り、『伊勢原市内社寺縁起集』（一九七三年三月、伊勢原市教育委員会）に絵全

部の写真と詞書の翻刻が載る。

3 『弾誓上人絵縁起』（通称「唐沢阿弥陀寺本弾誓伝」）

長野県諏訪市上諏訪唐沢所在法國山阿弥陀寺旧蔵、諏訪市岡村所在桑

原山正願寺蔵。紙本着色絵巻三卷。正願寺二十七世宮澤説雄師『山寺

物語・唐澤山阿弥陀寺』（二〇一七年十一月、宮澤真則）によると、正願寺は唐沢阿弥陀寺の開基・開山当時から関わり、江戸時代後期頃より正願寺住職が兼務したといい、件の絵巻はそれぞれ題簽に「弾誓上人繪縁起 上中下」とあり、蓋表に「（弾誓上人御代） 圖繪卷物 三卷」と記された桐箱に納められているという。

4 『弾誓上人絵詞伝』（通称「横浜法國寺本弾誓伝」）

神奈川県横浜市緑区鴨居所在大弘山光明院法國寺蔵。冊子本一冊。絵

はなく、詞書本文は概ね塔之峰阿弥陀寺本・一ノ沢浄発願寺本の詞書

と共通する。しかし細部に異同が多々存するので他系からの書写本と

認められる。

5 『弾誓上人白描絵巻』

東京都江戸川区所在宮島コレクション蔵。紙本白描絵巻二卷。中卷欠。

詞書はなく、絵場面に添えて画題詞を付す。

6 『弾誓上人掛幅絵伝』

京都市左京区大原古知平町所在光明山法國院阿弥陀寺蔵。紙本着色掛

幅絵伝三幅。絵場面に添えて画題詞を付す。

7 『弾誓上人掛幅絵伝』

三重県津市木造町天台真盛宗引接寺蔵。紙本着色掛幅絵伝三幅。堤邦

彦氏『絵伝と縁起の近世僧坊文芸』（二〇一七年一月、森語社）、拙稿「弾誓・澄禪・

常宇資料(1)」（学苑一九二五号）に写真が載る。

8 『彈誓上人繪詞伝』

長野県飯田市丸山町所在佛性山阿弥陀寺蔵。紙本着色掛幅絵伝一幅。原本無題。掛幅左端に「文久二壬戌星開山上人二百五十回遠忌當山十四主進誓上人代執行」とあり、文久二年（一八六二）彈誓二百五十回遠忌に際して十四世進誓忍阿代に制作され、これをもって遠忌法要が執行されたものと知れる。絵場面三十齣にそれぞれ金泥で短文の説明が記されている。宮澤一成師『足あと「一」阿弥陀寺史』（二〇一三年十月、佛性山阿弥陀寺）に写真が載る。

9 『彈誓上人略伝』

長野県松本市光明山念来寺旧蔵、諏訪市岡村所在桑原山正願寺蔵。卷子一卷。漢文。松本念来寺が明治初年の廃仏毀釈で廢寺になった折、唐沢の法國山阿弥陀寺に移り、さらに正願寺に移管された。本書は貞享元年（一六八四）五月に淨発願寺空營禪阿寂心律師と念来寺空幻明阿が古知谷阿弥陀寺蔵の彈誓伝「驗記」等残欠を整理書写したものでこれを法國山二十一世・正願寺二十六世・京都百万遍知恩寺六十七世を歴任した宮澤説賢師が和文に仕立てて注記を施し『彈誓上人略傳』として昭和十一年（一九三六）八月に公刊している。

10 『彈誓上人繪詞伝』（通称「古知谷本彈誓伝」）

古知谷光明山阿弥陀寺十世信阿宅亮撰『彈誓上人繪詞傳』二卷二冊。絵入版本。柱題は「行狀記」。下巻末に明和四年（一七六七）十月二十五日付宅亮識語。天明三年（一七八三）十二月宅亮筆『當山諸記録撮要并靈簿之所由』（写本一冊、宮島コレクション蔵）に「開山繪詞傳梓行明和五年戊子歳」とあって明和五年の開版と知れる。本書版行までの経緯は拙稿「彈誓・澄禪・常宇資料(1)」（『学苑』九五号、二〇一七年十一月）参照。なお堤邦彦氏『絵伝と縁起の近世僧坊文芸』（二〇一七年二月、森話社）には挿絵全部の写真を収めた翻刻と詳細な伝本解題を載せる。

11 『彈誓上人繪詞伝翼贊』

八事山興正寺五世妙龍諦忍撰『彈誓上人繪詞傳翼贊』二卷二冊。題簽

「古知谷繪詞傳翼贊」。下巻末に明和四年十一月十二日付諦忍識語。安永六年（一七七七）版の後印本、また無刊記本がある。信阿宅亮から『彈誓上人繪詞傳』の草稿の校閲を依頼された諦忍が彈誓伝事績の注釈書として撰じたもので、古知谷においては宅亮撰『彈誓上人繪詞傳』と諦忍撰『彈誓上人繪詞傳翼贊』が彈誓伝の基本資料として尊重された。

※

右のうち、4「横浜法國寺本彈誓伝」と通称される大弘山光明院法國寺蔵『彈誓上人繪詞伝』は表紙に題簽の剝離痕があるが欠失していて原題が知れない。巻尾に「大弘山光明院法國寺什物當寺縁起」とあることをもって、ここでは「大弘山光明院法國寺蔵當寺縁起」と仮称し以下に翻刻紹介する。

本書本文は概ね塔之峰阿弥陀寺本・一ノ沢淨発願寺本の詞書と共通するが、たとえば上人が諏訪から武蔵国ではなく相模小机郡鴨居村山中に移ったとすること、幡随意白道上人からの招請文は唐沢山ではなくこの地で受けたとするなど本書独自の所伝があり、用字も右絵巻両巻のいづれとも細部に異同が多々存するから、絵巻を座右に詞書だけを書写したものと認められない。また漢字に付された音訓は文字の判別に迷ったゆえのことと考えられるから、原本ではなく書写本であって、巻末四十五丁以下の所伝は法國寺独自の彈誓伝として書写者が新たに加えたものと考えられる。

翻刻に当たっては可能なかぎり原文の表記を尊重して、「燒夢（曉夢）・天摩（天魔）」など明らかな誤写・誤字もそのまま翻刻した。ただし「末・末」「己・己・己」などの混用表記は文意をとって適字を置き、虫損による判別不能の箇所は字数分の空格を置いた。

法國寺は宝徳三年（一四五二）彈誓開山と伝え、上人が洞窟に残し置いたという阿弥陀如来立像（江戸時代前期制作）を本尊とし、上人自刻という八臂辨財天坐像を祀る。寺辺を今も阿弥陀谷戸と称するのは、上人が山腹の洞窟で念仏修行し一帯を教化した名残という。

なお、法國寺住職池田真理雄師には御高配と御親切を頂戴した。記して深甚の謝意を表す。